

葛城 真治

KATSURAGI Shinji

本誌編集委員



21年7月より編集委員を務めさせていただいております東京電力の葛城です。取り立ててお話しできるような趣味がありませんので、ちょっと真面目な話題におつきあいください。

昨今の不況や公共工事の縮減、熟練経験者の大量退職等で土木工事関係の技術屋にとっては「技術の継承」が大きな悩みの種ではないでしょうか。当社の地中線管路工事においても、現場の施工技術に関して配管工や管路こわし工といった電力固有技術の維持継承問題に関して、業界内でも取り組んでおりますが、これといった解決策が見つからない状況です。

そこで、技術継承の一例として、私の郷里の山口県岩国市の錦帯橋を紹介します。日本三橋、日本三奇橋の一つとして有名ですが、私自身が、錦帯橋や瀬戸内海の橋を見て育ったために土木屋になったということもあり個人的に思い入れのある橋です。ただし、現在の仕事から、橋屋というよりはトンネル屋になってしまいました。

錦帯橋は、初代の創建は1673年ですが、1950年の台風の洪水ではほぼ完全に流失するなど、何度も洪水による損傷を受けています。その一方で、橋自体が50年以上持つにもかかわらず、橋のス

パン毎に違いがありますがこれまでに9～16回の架け替えが行われており、架け替えは大工技術の継承の意味合いの方が大きかったと推測されています。錦帯橋の大工は、橋の土木技術と宮大工のような建築技術の両方が必要な職人芸です。

2001年から3年間かけて行われた平成の架け替えでは、テレビや土木関係の雑誌でも報道されていましたが、約50年に一度しか行われなため、技術継承に配慮した設計図書の保存、高齢の大工棟梁による若手大工の育成、数十年後の架け替えに向けた材料の植林からの確保等が印象的でした。

一方、当社の管路工事においても、推進工事の曲線線形が複雑で厳しい条件の中、施工会社の技術で最近の推進工法の特徴を駆使して工事を完成しておりますが、マシンの癖や線形の補正方法等の施工班の経験による技術も職人芸の一つではないでしょうか。難しい線形の施工が完了した後に、協力会社の施工班の方が「どうです。見てください!!」と自慢げに発注者側である私に言われたことがあります。高いモチベーションで工事を実施していただいていることに非常にうれしく思いました。

今後、我々の工事でも、錦帯橋の架け替えのように一つ一つの工事で若手を育成し大切に記録を保存することと、発注者としても施工技術の発展を導くような設計を実施することが技術の継承に必要なことと思っています。編集委員としても微力ながら技術の継承に少しでも貢献できればと思います。



岩国：錦帯橋 全長193.3m



柳井：大島橋 全長1020m